

寺田寅彦

夏目先生の
俳句と漢詩



夏目先生の俳句と漢詩

夏目先生が未だ作家としての先生自身を自覚しない前に、その先生の中の作家は何処かの隙間を求めてその創作に対する情熱の発露を求めて居たもののように思われる。その発露の恰好な一つの創作形式として選ばれたのが漢詩と俳句であった。云わば遠からず爆発しようとする火山の活動のエネルギーが僅に小噴気口の噴煙や微弱な局部地震となって現われて居たようなものであった。それにしてもその為に俳句や漢詩の形式が選ばれた

という事は勿論偶然ではなかつたに相違ない。先生の自然觀人世觀が始めから多分に俳句漢詩のそれと共通なものを含んでいた事は明であるが、併しかし又先生が俳句漢詩をやつた事が先生の自然觀人世觀に可かなり也の反作用を及ぼしたであらうという事も当然な事であらう。兎とも角かくも先生の晩年の作品を見る場合にこの初期の俳句や詩を背景に置いて見なければ本当の事は分らないではないかと思ふ事がいろいろある。少くも晩年の作品の中に現われて居る色々なものの胚子がこの短い詩形の中に多分に含まれて居る事だけは確實である。

俳句とは如何^{いか}なるものかという問に対して先生の云った言葉のうちに、俳句はレトリックのエッセンスであるという意味の事を云われた事がある。そういう意味での俳句で鍛え上げた先生の文章が元来力強く美しい上に更に力強く美しくなったのも当然であろう。又逆にそのような文章を作った人の俳句や詩が立派であるのは当然だとも云われよう。実際先生のような句を作り得る人でなければ先生のような作品は出来そうもないし、あれだけの作品を作り得る人でなければあのような句は作れそうもない。後に「草枕」のモニューメントを築き上げた巨

匠の鑿のみのすさびに彫んだ小品をこの集に見る事が出来る。

先生の俳句を年代順に見て行くと、先生の心持といったようなものの推移して行つた迹あとが最もよく追跡されるような気がする。人に読ませる為の創作意識の最も稀薄な俳句に於て比較的自然的な心持が反映して居るのである。例えば修善寺に於ける大患以前の句と以後の句との間に存する大きな距離が特別に目立つ、それだけでも覗かつてみる事は先生の読者にとって可也かなり重要な事であろうかと思われる。

色々の理由から私は先生の愛読者が必ず少くもこの俳句集を十分に味わってみる事を望むものである。先生の俳句を味う事なしに先生の作物の包有する世界の諸相を眺める事は不可能なように思われる。又先生の作品を分析的に研究しようと企てる人があらばその人は矢張充分綿密に先生の俳句を研究してかかる事が必要であろうと思う。

（『漱石全集』（昭和三年版）月報第三号（昭和三年五月））

日本文学電子図書館

夏目先生の俳句と漢詩

著 者：寺田寅彦

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行



日本文学電子図書館